

神奈川大学人文学会五〇年史に代えて

人文学会創立三三五年を祝つて

大 林 文 彦

人文学会が昭和二八年に創立されてから、今年で満三五年を迎えるに当り、まず何よりも心からの祝意を表したいと思います。ここに至るまでの、一〇年、二〇年といった創立以来の区切りの時点で、当学会に深く関わった諸氏が残された資料を再読し、先輩諸氏、学生部会の諸君、そして歴代の常任委員会構成員諸氏、学会員といったすべての人々の努力を想起するにつけ、三五年という歳月の重さを感じ入っている現在です。

「人文研究」の定期的刊行に現わされている学会員の研究活動、「神奈川叢書」の刊行に見る共同研究のいくつかの結実、インゼミ大会や「世代」刊行に現われる学生部会の活動、学内外を対象とした研究・講演会活動が、ともかく今日まで維持できていることは無視できるものではなく、改めて先輩諸氏をはじめとする人々の熱意や努力の積み重ねに思いを至してしまいます。

草薙正夫氏の「十年の回顧」、故山本新氏の「二〇年をかえりみて」を読むと、人文科学研究中心であった当学

会が、外国語学部と深く結び付いていたことが分かります。その外国語学部も創立以来今年で満三三年を迎え、中国語学科が新たに開設されました。学部構成員も今や百名を超えようとしております。学会の中心理念とも言わき、人文科学をはじめとする学際的研究、共同研究を旺盛に推進すべきスタッフは、数の上では、今や十分であります。

外国語学部創立と相前後して本学に就職した私にとって、人文学会はじつになつかしい場所であり、また人文学研究所という実在の場所と結び付いています。学会が人文学研究所という機関と複雑にからみあっているため、学会の諸会合は人文学研究所内で持たれるのが常でしたが、ここで私の言う場所は、現九号館地下にあつて、学会と言つと当時はそこを指したものでした。

大学紛争前にこの場所を知り、草薙正夫氏、故山本新氏はじめ多くの大先輩やその他の学会員、他学部の人々や時に学生たちなどが、横専時代の古い衝立やソファのある一室と、隣接の書庫を持つ、半地下の薄暗いこの部屋に出入りし、討論や休息、あるいは仕事に当っていた情景をじつになつかしく思い出します。あの頃の私たちは、授業の合間には、本館の教授控室よりも、いつもここに來たものでした。

そこでは学実績を価値判断のすべてとした者や、実績の上にあぐらをかくとする者のわずかな隙を突こうとする者も見られる中で、深く実りある討論や質疑応答、口角泡を飛ばしての大激論などを交えた長い日々が流れる——そして紛争が勃発。連日の団交や教授会、クラス討論や本館封鎖を含む、本学のあり方を大きくゆさぶつたあの長い時間と、ベトナム戦争と日本との関わりが代表するような、自分と世界との関係の根本的な問い直しがそうであるような、主体性や行動規範の確立をまさぐる重く熱い日々。実質的に研究活動が長期にわたつて中断されざ

るを得なかった、あのいわば疾風怒濤の時期は、それを生きた者にとつて、今日の教育研究活動につらなっているはずだと信じたと思うとしか、私には表しようがありません。

すでに他界された会員諸氏、本学を去られた人々、紛争時に鋭い設問を投げかけた学生部会の人々、有能な事務職員として学会・研究所の業務を黙々と担っていた川端君や田島さんの姿が、半地下の金網越しの陽光に浮かんで来るような、想えば、多くの人々の思い出があざやかに甦つて来ます。

私はかつて学部内で、中央の学会機関誌のみを良しとし、「人文研究」を軽視する発言を耳にしたことがありますが、学会の末端に列なっているにすぎない自分でも、あまりに愚かな発言、自らの立つ場を否定する考えだと感じました。与えられた紙数がそろそろ尽きます。人文学会の発展をつねに念願されつつ活動された故山本新氏の回顧文の結語、「本学会は、まだまだその潜在的可能性を十分に出しきってはいない……」を、絶えざる励ましと受け取りながら、この小文を終えるしだいです。